

語り伝える
えいがしま
昭和のくらし



江井島まちづくり協議会 文化遺産部

【はじめに】

江井ヶ島に住んでいる高齢の方々に、かつての江井ヶ島の様子や生活ぶりなどについて、話を聞く会を開きました。平成28年(2016)6月から令和元年(2019)10月まで合わせて7回に及びました。話をうかがったのはおおよそ、大正9年(1920)頃から昭和19年(1944)頃にお生まれの方々です。

この記録集はその時に伺った話の要旨をまとめたものです。話の内容を【学び・教育】【遊び】【昔の姿】【生活】【戦争体験】【産業】の編に分けました。語られている内容は、昭和10年代から30年代(1935～1964)の概ね30年間になります。

ひとりの方の話である場合もありますが、2人以上の方をまとめた場合もあります。

本文中の()内のひらがなは、読み方です。また、本文の〔 〕内に記したのは説明のための注記です。ご本人が語られた言葉でなく、編集の際に書き加えたものです。年号は「和暦」を使いましたが、()内に西暦も併記をしました。

なお「えいがしま」の表記は「江井ヶ島」を基本として、行政的な表記「江井島」も必要に応じて使いました。

目次

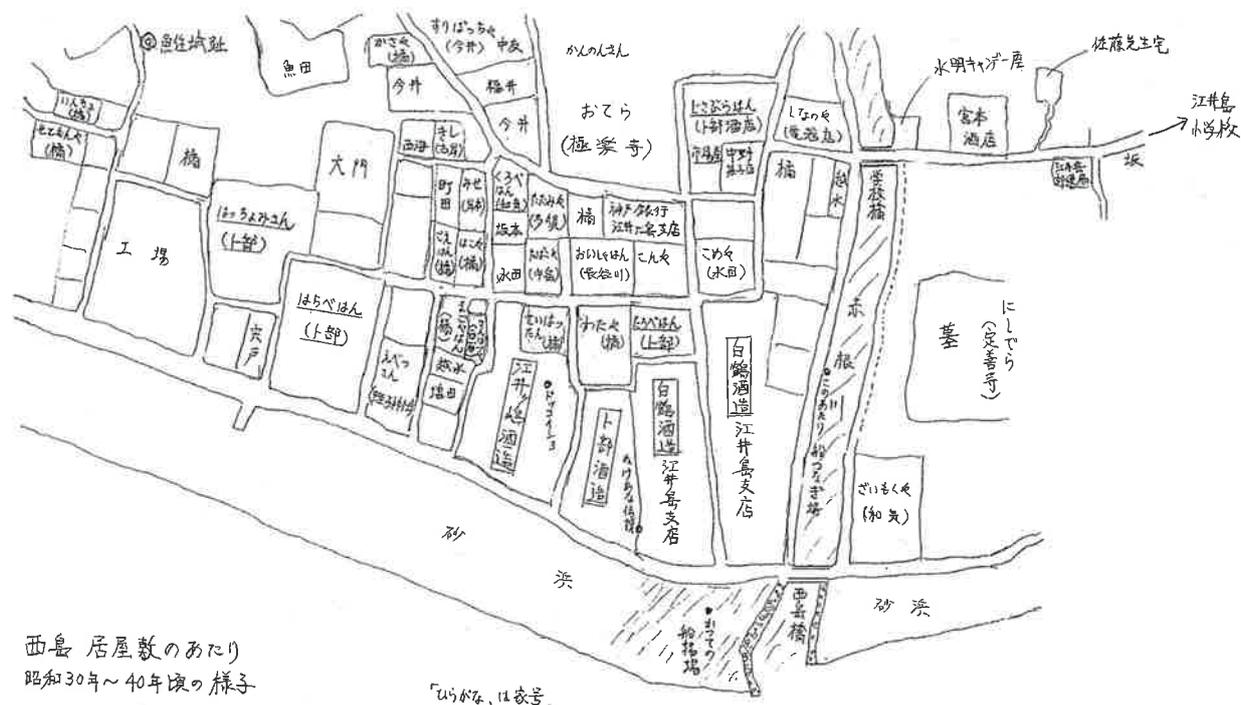
学び・教育編	3
小学校への通学路	3
学校生活	4
遊び編	8
昔の姿編	10
歴史	10
自然	12
生活編	13
戦後	13
病気・医者	14
ごみや肥溜め	14
交番	14
結婚式	15
新築（棟上げ）	15
葬式	15
行事	16
秋祭り	18
戦争体験編	19
産業編	21
漁業	21
瓦産業	23
江井ヶ嶋酒造	23
電話交換手	26

写真／表紙 赤根川改修前の河口付近を北から望む
裏表紙 昭和50年代、海水浴客で賑わう江井ヶ嶋海岸

《小学校への通学路》

江井島小学校へは、戦争中でしたから西島の人は朝の通学は極楽寺の前に集まって、みんな並んで行きました。

極楽寺の前の道より、神戸銀行（三井住友銀行の前身の、江井島支店）の前を通過して進んでいくと、しなの屋の電気屋があって、その前の学校橋を渡って、まっすぐの道、昔の郵便局の前を通過して学年の異なる子どもたちもみんな一緒に小学校に行っていました。通っていた江井島小学校は、今は少年自然の家になっています。



森の人は、寺前の細い道を通って赤根川沿いに行き、学校橋を渡って通学していました。

1日に貰う5円の小遣いは、紙芝居などに使っていました。橋の手前に駄菓子なども売っているタバコ屋がありました。

今では多くの家が建っていますが、遊びに行くときなど、子ども心に西島の北の人は江井ヶ嶋酒造の北側で東の蔵を通り、公会堂を南に下がり、さらに火の見櫓を下り、極楽寺の前を通り、学校橋を渡って行きました。夏の屋下がり両側に蔵がある細い道（今のながさわの西側にあった酒蔵付近）の薄暗い静かな道を一人で歩いていると、別の世界に引き込まれそうな妖しい思い出が印象に残っています。

昼は集団で家に食べに帰って、防空頭巾をぶら下げて、例えば西島は東、西、下所（したんじょ）、上所（うわんじょ）の4つの分け方で帰っていました。それでもいったん帰った後、ちゃんと昼からも学校に来ていました。しかし空襲警報が鳴ったら帰る、帰る途中で鳴ったら急いで帰るんです。今の

パトカーみたいにサイレンが鳴り続けて、警戒警報なら1回だけ鳴って、「空襲や」と言って急いで帰っていました。

東島の方は早く家に帰れるが、家が遠い西島の方は、どのようにして帰っていたのでしょうか。

《学校生活》

昭和9年(1934)生まれの私は、終戦の時は小学5年生で、3年生くらいまでは勉強もあったけど、それ以降は自習ばかりでした。この年齢では、なぜか一つ上も下も人数は少なく、私たちの年齢が一番多く倍以上いました。

先生が代わってしまったり、いないことが多かったので、昆虫取りなんかに行ってオニヤンマなどをよく取ったものです。ただ、戻って来て先生に見つけて立たされたのを覚えています。勉強していない年代です。

国民学校(昭和16年小学校の名称を改め)の学芸会の思い出ですが1年の時に主役をしました。小さい子は一寸法師役で、その子が今は大きくなっています。2年の時には、ミッドウェー海戦(昭和17年中部太平洋で起こった日米海戦)があって、最初の調子のよい時と違って学芸会はなかったですね。



昭和16年学芸会



戦前 小学校の運動場でサッカー競技

昭和14～15年(1939～1940)頃の江井ヶ島はのんびりした時代で、野球をやっていた写真を見ていると「えいがしまクラブ」と横文字で書いたユニフォームが写っていました。

江井ヶ島から疎開で出て行く事はありませんが、疎開先として多くの方が来ていました。江井ヶ島は集団疎開先ではなく、縁故を頼って子どもたちは親戚に泊っていました。西江井でも大きな家は、余っている離れを提供していました。



昭和 16 年 小学校講堂

運動会の時に教頭先生が戦争の事を鼓舞するのです。生徒は竹槍を持って、チャーチル（イギリスの首相）とルーズベルト（アメリカの大統領）をわらで作って「やー」と突いていました。

小学校は運動場が芋畑になり、周りは防空壕になりました。

国民学校では、軍隊教育で奉安殿（ほうあんでん）（御真影や教育勅語謄本などを安置）に天皇陛下の御真影が飾ってあってそこを通るたびに頭を下げるんです。学校に憲兵が一人おり、職

員室の教頭の横にいて、どんな教育をしているかを見張っていました。

「天皇陛下」と言うとパツと気をつけて、しゃきっとしなければなりません。国のためと思わなければいけない。なんでも国のためでした。

戦争中は、親戚を頼って学童疎開で、東京から来た子なんかもおりまして、一緒に勉強していました。私の家にも神戸の子が来て、納屋を住むように改造していました。そのような方は6年になり、卒業するところかに行きました。

学校の中では、先生に反抗でもするものなら、廊下に立って足蹴にされて、なんぼやられたか分かりません。それが終戦になって、戦争に負けたら先生がコロッと変わりました。

終戦は5年生の時でした。私の姉が酒蔵で働いており、職員が4人で女性が1人の軍関係の仕事を12月に従事し、翌年の8月に終戦となりました。終戦になったときにカニ缶や食べ物がいっぱい入っていたのを貰ってきました。軍需産業関連の隠し場であったのではないかと思います。

江井ヶ島に「学生会」というのがあって、ト部さん、田中さんといった酒造りの子どもで早稲田や他の大学に行っている学生が、夏休みで戻ってくると女学校や中学を目指す子どもに教えてくれる講座がありました。江井ヶ島酒造の補助があったようです。



戦前の学生会のようす

終戦後、履物が無く、ほとんどがわら草履を履いていきました。かかどが破れて来て、雨の時なんかは背中まではねが上がりました。靴なんか履いている子は少なかったですね。小学校の子どもに、靴の配給があって、くじ引きで決めるんですが、めったに当たらないんです。くじ引きで3人に当たるのです。その人らは靴を履いて来て、履いてきたその日の勉強中に盗られて無くなってしまった人を見ました。



昭和 23 年 教室の前で児童が集合

で 3 年生から別々のクラスですが、時代によって、また戦後は違いました。同窓会は 2 年に 1 回していますがその間に 2～3 人亡くられています。開会は黙とうから始まります。



昭和 13 年 小学校の授業



昭和 13 年 江井島小学校正門

上履きもわら草履で、お祖父さんなんか編んでくれてました。授業が終わって掃除当番のときに、教室や廊下にわらがいっぱい落ちていました。今みたいに油引きでないの、雑巾を絞って拭いたものです。

ついこないだも同窓会をしました、22 人集まりました。疎開していた時代は 50 人くらいいましたが、戦前の国民学校では「い組」と「る組」の 2 クラスで 2 年まで男女一緒

戦後、学制改革で「シンチュウ」と言ってまして、大久保中学校という新制中学が出来ました。本校の大久保に校舎がなく大久保中学の江井島分校として先生が 3 人くらいおり、私たちは一期生でした。昔は、小学校は 6 年、尋常小学校が 2 年、青年学校が 3 年と

思います。旧制中学校というのはあったけど、戦後に新制中学校ができました。ちょうどこのころに義務教育の新制中学ができたので、新中に行きました。男女共学でした。

私は中学を出て、八木まで行ってそこから北へ上って大久保にあった高砂の松陽高校の分校の夜間に通学しました。4 年間行きましたが、会社も学校があるからちょっと早く帰らしてくれるんです。5 人行きましたが他の人は亡くなり、今では私だけとなりました。

特に、終戦直後の中学は教科書がなくて先生もやりにくいと見えて、そこで考えているんな話をしてくれました。ナガオ先生という先生がおられて、本がなくても、「昔話」は上手でした。

みんな仲が良いから勉強などせずに遊んでいました。中学 3 年生になったときに本校の大久保と合併しましたが、大久保は皆勉強して賢くて江井ヶ島はみんな勉強してなくてアホではないけど、皆勉強

していないのです。しかし商売は上手でした。

大久保は、社宅が多くて川崎航空機や、神戸工業（今の富士通明石工場）の子どもが多かったので勉強できたのです。

大和製衡や神戸工業、ニッケが川西財閥で、今は新明和工業が川西の財閥として残っていますが、西島の瀬戸物屋のタチバナケンジが技術部におりまして、私の兄も技術部におりましてラジオで短波放送を聞いていたので、戦争に負けるのを知っていたと聞きました。

小さいときは大きくなったら何になるうなんて考えたことはありません。お国のために、男やったら兵隊さんになると思っていました。

私は終戦前の昭和19年（1944）に小学校を卒業、その後、小学校に入るときは尋常高等小学校と言っていました。4年の頃に国民学校に変わりそのまま卒業、そして高等科が2年ありました。1年の時は、戦争中でしたから女生徒は学徒動員に行きました。

私は江井島小学校の2年生で終戦、昭和25年（1950）に小学校を卒業しました。

その年の年齢によって、新制中学校に行くか高等小学校に行くか選択ができた時がありました。新制中学校ができて高等科に行きました。結局、新中には行かないこととしました。

授業で、2キロくらいの遠泳があり、ふんどしで学校から直接海へ行きました。

相撲取りの「二見出身の元小結」清水川が小学校6年生の時（昭和30年頃）、江井島小学校に来たのを覚えています。運動場に土俵を作り、



清水川力士

清水川と相撲を取りました。

昭和24年頃、中学3年の時に校長先生が朝礼で雑炊の作り方を教えてくれました。遠足は、金ヶ崎の北に行きました。そこには温泉（鳥ヶ



昭和初期 全盛期の鳥ヶ谷温泉

谷（とりがや）温泉）がありました。他の場所へは電車に乗っていったこともありました。

江井島小学校で、夏の夜の行灯掛けや江井ヶ島音頭で盆踊りも懐かしい思い出です。



盆踊り

子どもの時は、戦争はまだ始まっていませんが、遊びでもベツタン（厚紙に絵が印刷された少し小さめの長方形のカード）なんかは、兵隊さんの図柄ばかりでした。トランプなんかはありません。ゲームは軍隊の関係するもので、スパイという言い方でなく、間者（かんじゃ）と言って、それが強くて歩兵がすぐに負けました。

終戦後、疎開させていた部品保管場所に行って、ベアリングが多く入ったコマを終戦になったからと勝手に貰って、4つ付けて国道を転ばして遊びました。

西江井ヶ島駅に貨物の引込み線（駅の南側）があったころ、そこで遊んでいました。

遊びの野球なんかは、金持ちの子や酒屋さん、景気のええとこのボンが道具を持っており、それで遊びました。

紙芝居は、紙芝居屋が食べるもんを売ってそれを買って見ました。小学校の近くに、木下のブリキ屋の南の方に貸本屋があって、あれが楽しみでした。

池にある「はす」の黒っぽいヒシを美味しく食べました。特に甘い物が無かったので美味しく思いました。

ずっと家の外で、集団で遊んで、いろんなゲームやガキ大将の言っていることをよく聞いていました。横のつながりもあったけど、縦のつながりもあったように思います。



昭和40年代 東島住吉神社境内

女の子の遊びは、中学校の時まで、お手玉、ゴム飛び、マリつき、鬼ごっこ、押しくらまんじゅう、かくれんぼ、縄跳びなんかで遊んでいました。缶蹴りや「けんけんぱー」と言いまして、丸書いて遊びました。でも子守しているときなんかは走られへんで缶蹴りができません。

男の子の遊びと言えば家の中でなく、外でした「パイ」（鋳物製のこま）という遊びや、ベツタン言うのは男の子の遊びでした。女の子は着せ替え用の

紙が売っていて、それを買ってスカートやズボンを切り抜いて人形を作り、着せ替え人形遊びをしていました。西島の極楽寺横に「中野さん」というお店でそんなものを買ってきて楽しんでいました。学校の登下校の道でしたから毎日寄るのが楽しみでした。

カドきり・かわら投げ・ベツタン・パイ・釘さし・どうま・ジャコとり（どじょう・たにし）・缶蹴り等の遊びで楽しみました。



昭和40年代 赤根川右岸の横波止で魚釣り

昔は子どもの時に海の「ほおずき」が流行ってしまっていて、今のチューインガムみたいに口に入れて遊んでいました。卵のようなものが入っている袋に穴をあけ、中身を出した後の袋を口の中でキュッキュッと噛んで遊びましたが、あの卵のようなのは何やったんですかね。卵としたら、何の卵やったんですかね。私らは漁師でないので、漁師の子らから貰うのが楽しみでした。

明商が江井ヶ島に来る前に土を取って整地をした場所で野球ができました。

また、今のながさわ酒館は白鶴酒造の蔵で、その近辺の竹藪で遊んでいました。男子はみんな三木の肥後守（ひごのかみ）（折りたたみ式のナイフ）を持っていました。



肥後守

子どもの遊びでは「ぼらあみ」と言うのがあって、みんなで追い込んでいく遊びがありました。

また当時は今と違い、子どもの遊びが多くなく、遊びではこのほかに神社の裏の木にナワを架けて大きなブランコを作って遊びました。落ちるものもいて、怪我をするものもありましたが、楽しいものでした。

夏は、毎日海水浴や魚釣りをして、銚（もり）でアブラメを突いたり、石をめくればタコもとれました。

《歴史》

谷八木の史家から、「江井ヶ島は野仏、五輪塔が沢山ありますね、あれは秀吉が毛利水軍を支援した庄屋の卜部一族を罰し、秀吉側にいた柳井の人が南側の江井ヶ島の住民を見張り、報告する命令をして、多くの住人を殺傷し柳井の香盤池で刀を洗い、住民が五輪塔を作って祀った結果です」と聞きました。柳井の人は仕方なくさせられたことで、江井ヶ島の人と共にコミュニティが背負った受難であったと考えています。



現在の柳井の香盤池



昭和 53 年に建立の延命寺供養塔

「魚住泊」は昔、住吉神社の今の神主さんのお父さんが江井ヶ島とよく張り合って「魚住泊」は、中尾であると主張していたが、神社が地域を治めていたことが背景にあったのだろうと思います。

東島の定善寺は西寺、長楽寺は中寺と言われていますが、東寺は東江井にあったようです。日工の広い道の西側にあったみたいで、ちょうど今の大歳神社の横側を祖父が「あそこは寺の土地やったから買ってはならない」と言っていました。そこが東寺であったとは聞いていませんが、多分その事と思います。東江井コミュニティ会館の真西になり、山田の酒屋さんや細田さんの家がありました。

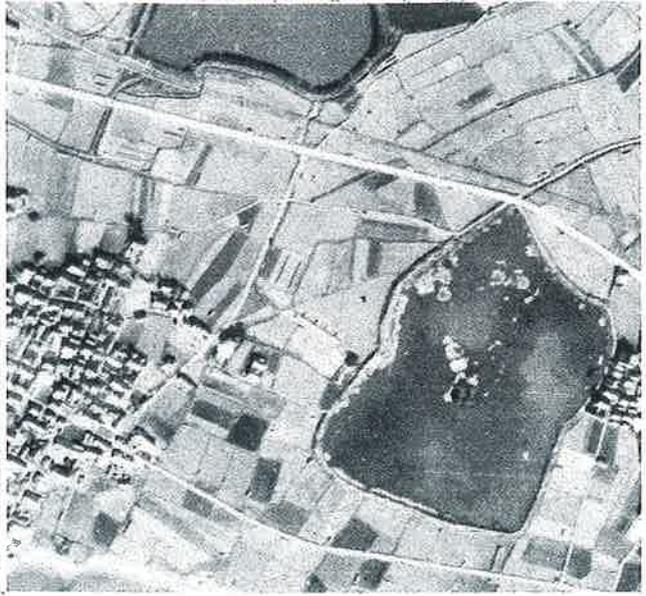
東島と西島の村の境は、滝本さんあたりに西島がちょっと入っています。

昔の赤根川は今と違って、両親からは「ながさわ」の北ぐらいから定善寺の南側を通り東の今の船の係留場所に流れていたと聞いていますが、私はそれを知りません。今と同じでまっすぐに海に流れていました。先人が言うような東島の港の方に向かって流れてはいませんでした。

今の大歳は、かつては松林で、そこに昭和 40 年（1965）の前くらいに九州の炭鉱に従事していた人が移住するため、住宅を解体して、船で材木を運んできて、江井ヶ島港から大歳に運んで再築しました。大歳は海から攻めてくる見張りの場所で、番所と言うてた所です。今と違って、西江井ヶ島駅に行くのに西には家がなくて風が丸当たりでした。海からの風で寒かったですね。



東江井「羽の池」付近の地図(昭和38年「国土基本図」)



昭和21年11月航空写真撮影

日工が来る前には羽の池（はのいけ）と観音堂がありました。

数あるため池の中、はじめに、地域開発で日本列島改造の波にのり姿を消したため池です。今は、明石から移転してきた日工（注）の立派な生産工場になっています。

美しい名前の羽の池を懐かしみます。羽の池には小さい中の島がありました。

山電より南にあるため池、電車の窓から見る羽の池の四季はすばらしく、東江井の海岸には、明石瓦の窯元の煙突が林立し、煙を上げていました。

明石から電車に乗って江井ヶ島の手前になると、東江井から西江井の「かわらっしゃ」（瓦製造業者）の煙突が林立し、今は日工になっている池や墓、池の真ん中の島や、結構な構えの観音堂（浜国と山陽電車の間に移設）が見えて、のどかできれいな光景でした。

（注）1919年、「日本工具製作(株)」資本金50万円で神戸にて創業、1921年に西新町に移転、1962年、江井島工場新設（10万㎡）その後、本社も江井ヶ島に移す。東証1部上場企業。

昭和30年頃の今の江井島小学校の北側の浜国は砂利道で、浜国北側と南側の高さは同じ位の高さの丘の状態、浜国がその間の北よりは少し低い位置にありました。南側の丘の状態を低くして明商を作ったわけですが、そこから出る土は粘土用の良い土で、掘った土を馬力で瓦用、土管用として運んでいました。その後、明商がここに移転して、さらに魚住に移転、江井島小学校が、今の少年自然の家からここに移転しました。

赤根川も今と違う流れで、曲がった川でしたので堤防がなく、いつも台風の際は浸かって、水害を受けていました。西島のお墓では暴風雨の影響で墓から人骨が出たりして怖かったのを覚えています。

《自然》

小学校から赤根川まで田圃が段々畑の棚田になっていました。

西江井ヶ島駅や山陽電車の思い出は、道の西側は田んぼばかりで家がなく、魚住の駅から電車が来るのが見えていましたので急いで走って駅に行きました。また、西江井ヶ島駅に貨物の引き込み線があって、戦争中にはそこに飛行機の部品のようなものを保管してあり、よく取りに行きました。それを利用してみんなで大きな道で、今と違って車がそんなに通りませんので遊んだりしました。



昭和 40 年代 江井ヶ島酒造の工場群

江井ヶ島酒造は西江井ヶ島駅から家が殆ど建っていなかったためスレートの屋根の蒸留棟がみえました。昔は国鉄の線路からでも家が少なかったから見えていました。「白玉ホワイトワイン」のネオンがありました。

東島に「どっこいしょ」(浅井戸)がありまして、何か所にありました。水は鉄分が多かったですね。定善寺の井戸は良い水であるということからポンプでくみ上げていました。今は寺のガレージの所の一つあります。私の自宅にもありましたが、鉄分が強く、有馬の湯の色みみたいなものでした。

当時はまだ電車の踏切に踏切番がいて、江井ヶ島の踏切番は有馬さんという方が長く勤めていました。いまなら電車が接近したら、分かるようになっているけど、どのようにして分かっていたのか疑問です。



江井ヶ島海岸で潮干狩り



改修前の赤根川 (学校橋の北)

《戦後》

潜ったらいっぱい魚がとれて、タコやアサリもいっぱいとれました。その頃は江井ヶ島だけでなく、魚住、浜谷、藤江にも漁協がありました。江井ヶ島の海岸で貝を使ってよく遊びました。食事と言えば雑炊ばかりでした。

当時は、夏は涼しくて、冬は暖かいので藁屋根の家が多く、火事が多く付け火とか、火事は本当に多くありました。怖かったですね。

小学校の帰り道、ガマの油売りが来ていました。蛍光塗料を売る露天もよく見かけました。

子どもの頃は八百屋があって、そこでは何でも売っていました。今でいうスーパーの小さいものでコンビニのようなものです。お盆になると初盆用の提灯まで売るといような店でした。

江井島総合市場が昭和44年(1969)に食料品を中心に、40店舗で開設された。近隣に大型スーパーが進出の時代で現在は12店舗が営業中です。



総合市場の外観



市場内の店舗

今の子どもは、塾に行ったりして家の手伝いはしませんが、私は、家の手伝いが主な仕事で、4人兄妹の長女でしたから子守ばかりでした。妹は4つ違いましたが、子守は全然していません。親に子ども用の「ねんねこ」を作ってもらって、弟2人は小学校2年から6年までずっと背中におたして子守していました。遊ぶ時も背たろうて遊んでいました。親が百姓でしたから私が子守をせなんだら困るんです。



江井島酒館2階資料室の展示物

水道がなかった頃ですから、井戸の水を汲んでバケツで何回も運ぶのも、子どもの仕事でした。もっと小さい頃に昼間は電気がなく夜にならなかつたからつかなかくて、遊びに行つて、外で遊んでたら、ぱあーと電気がつくんです。電気がついたから帰るかと言って帰っていました。その頃の電灯は傘の下に裸電球が一つついていました。便所も電気がなく、お風呂も「ことぼし」

(手燭) といって、明かりを持って行っていましたが、薄暗かったですね。

よく停電してまして、晩に停電したらろうそく焚いたり、ランプをつけて代用したりしましたが、ランプの芯を作る「こより」を紙やきれで作りました。油はろうそくの垂れた油でした。

洗濯はたらいでするのが主流でした。昭和 35～36 年(1960～1961) 頃に洗濯機が出回り始めて、昔の洗濯機は、絞るときに手で回すローラーがついてまして、その間を通すのでボタンがローラーの間に引っかかり飛んでしまったことがありました。

《病気・医者》

戦争前からの医者は、中尾の正井医院しかなくて、江井ヶ島の東島にあった井上医院はそのあとから出来ました。

江井ヶ島では、医者は井上医院しかなくて良く怪我をしてはそこで見てもらいました。病気となれば何でも見てくれました。

当時は薬もなく、ちょっと診て、あとは家で寝ているだけです。昔は往診もあり、元の学校橋の東側に郵便局があって、その斜め前に人力車の車屋さんがありました。医者が往診用で利用していたと思います。萬谷さんはずーと後から出来た歯医者でした。

《ごみや肥溜め》

生のごみ出しは畑に入れて肥料にしていました。紙屑なんかは紙くずやさんが集めに来ていました。お手洗いは今みたいに水洗でないから使う紙は新聞紙でした。また人糞は田圃の肥料になっていましたが、中尾にそれを職業にしている「こえや(肥屋)」というのがありました。

肥溜めは、昔は「どうけ」と言うてましたが、それがあっちこっちにあって、今の西江井島病院付近の浜国沿いにもありました。そこにはまる人もおりまして、はまった人を「どうやん」と言うて、からかっていました。人糞を運ぶ牛車を曳いて農家に運んでいました。

また大久保に、「てんや」と言うて、鉄くずやアカ(銅)を集めに来る窪田という店がありました。大久保中学に行っていた折に、JR 大久保駅の東踏切の線路のすぐ北にありましたが、今から思うと「てんや」とはどんな字を書いていたんでしょうかね。

犬獲りという野犬を捕まえる職業の人がいました。何か怖かったのを覚えています。

《交番》

今は、交番という名称になっていますが、昔は駐在さんと呼んでいました。今の江井ヶ島駅から自然の家に行く途中の西江井の 5 差路の角にあり、当時は、山田巡査が駐在さんで勤務しており、この人が酒好きで有名でした。住民から「山田の駐在」と言われていました。

《結婚式》

今と違い、結婚式は自宅でやることも多く、庭先に近所の方が見に来ていました。私は昭和36年（1961）の結婚でしたから自宅でした。式は自宅で昭和30年代までで、40年代になったら結婚式場をするようになりました。

嫁入り道具は、嫁の家に箆笥なんかを入れて親戚の人に見てもらって、そこから荷物を出しました。嫁に行く家も大変で、荷物を出すときは「荷出し」と言ひまして、紅白の紐で飾っていました。



嫁入り道具の荷出し

嫁いだ先でも「衣装見せ」と言ひまして、近所の方が見に来てくれるのでそれを見せるのです。嫁を貰ったら、近所の人に見せなくてはならないので家の格が見えてしまうようなものがあって、そのような習慣がなくなってほっとした方も大勢いるでしょうね。

《新築（棟上げ）》

家を建てたら上棟式の時に「餅まき」をして、昭和62～63年（1987～1988）頃が最後でして、自治会で「餅まき」をしないと決まりました。色んな行事を止めることが自治会で決まった中で、餅まきが一番遅くまであったのと違いますか。

なんで止めるようになったかは、できる家とできない家があって、百姓の家ならもち米はあるからやれたんですね。

餅まきは一般にまくのは小さい餅ですが、「すまもち」と言ひまして四隅にはちょっと大きい鏡餅のような餅をまくのです。激しい奪い合いがありますね。

《葬式》

お葬式も家でやっていました。父も母も家でしました。今は車で参列することが多いので駐車場に困る事や、近所の手伝いをお願いすることの煩わしさなどから、昭和の終りくらいでなくなりました。

葬式には念仏ばあさんが来ていました。また、遠夜（たいや）ごとにお参りしてもらいました。昔は西島でしたら真言宗ばかりでしたのでそれでよかったのですが、今はいろんな宗派があって、このような風習はなくなりました。



自宅からの花嫁さん

嫁いだ先でも「衣装見せ」と言ひまして、近所の方が見に来てくれるのでそれを見せるのです。嫁を貰ったら、近所の人に見せなくてはならないので家の格が見えてしまうようなものがあって、そのような習慣がなくなってほっとした方も大勢いるでしょうね。

結婚したら結婚式のあくる日に、お嫁さんが「カミフダ」と言うて、紙にお金を包んで、子どもは勿論、赤ちゃんをおんぶしたお母さんにも渡していました。その紙には紅がちょっとついていました。私の子どもの時の経験では、半紙を4つに折って入れ物に入れて落ちないようにして赤い紅がついているのを貰いました。近所付き合いのあいさつ代わりになっていたんでしょうね。

また、お葬式があったら、隣保で手伝いに行っていました。隣りでお手伝いをしてもらっていましたが、できない家もありました。

東島の場合は、念佛講がありまして、その講の方がお手伝いに来て、煮炊きなどを手伝ってくれました。その時に若い方は白和えとか里芋の煮つけの料理を覚えたと聞いたことがあります。死んだ方をあきらめると言って「め」〔ヒジキ〕を炊いたりしていました。

お葬式の買い物は、お金のことははっきりとさせる事というのでしょうか、不正が無いようにというのでしょうか、必ず2人で行くように言われていました。買い物帳を持って行って内容を記していました。何事も2人連れでした。1人で行動するのは死に対して忌み嫌ったんでしょう。

また翌日には、亡くなった人の着物を洗う時は女の子が引っ張り合いして洗って、干す時は北に向いて干していました。だから通常では干す時は前を北に向いて干してはあかんと言われているのです。

亡くなったら家族は忙しくて家族以外の親戚がすぐに六地藏を回るのです。これはこの地域だけでなく二見の方も同じような対応をしていました。今では、六地藏のお参りは少なくなりましたが一部の家では、していると思います。そのようなしきたりを知っている人が少なくなったことが原因でしょう。

亡くなって3年間、地藏盆の日に参加していました。今でもやっています。御接待ですね。子どもが仰山来ます。大きな袋を持っていました。お米やお金やお菓子を貰ったものでした。

《行事》

西島公会堂で、青年団が映画会を年2回ぐらいしていました。

4月の3日にはお雛さんの初節句と言いまして、玄関を開けてお雛さんを見せたものでして、近所の子供たちが見に来るのでお菓子をあげていました。

如法寺の聖天さんは、毎年4月1日にのど自慢大会や踊りなど大変賑わっていました。今は、4月の第1日曜日に檀家の人たちでまつりを行い、参拝者には接待でおもちを配布しています。



現在の「聖天祭り」 聖天堂や拝殿堂が開かれている

「森は千軒」と言って賑わっていました。聖天さんを中心として栄えており、小さい時に如法寺の前にサーカスや芝居が来て、見に行きました。最大の楽しみでした。お寺の大垣さんのおばあちゃんが八卦を見られるので、何度も見てもらったのを覚えています。



現在の
長楽寺での
法要

和歌山県出身の徳本上人(とくほんしょうにん)が明石に来た時に、海神守護、海上安全を願い藤江の赤石の前で法要を行ないました。感銘を受けた東島の漁師は徳本講(念仏講)を開いた。今日では毎年 11月6日ぐらいまでに名号碑(徳本上人の弟子是得上人書の石碑)の前で法要をしています。

上人が11月4日に没したことに由来すると思われます。今は11月の第1木曜日に行われています。

長楽寺例祭の稚児行列は40年に一度、行われています。次回は令和5年(2023)に行われる予定です。



昭和18年
(1943)の
稚児行列



西島地区では七夕のかざり、お盆のお供えを海に流していました。森地区ではお盆のお供えはお墓で燃やしていました。今は江井島地域が東島のさざんか公園に集めています。

《秋祭り》



往時の東島の秋祭り



現在の西島の秋祭り



宮に向かう西島の屋台

東島・西江井・東江井の祭りの後に西島の祭りがありました。東島の祭りが台風で流れた折に順延になったので、西島の祭りに合わせて、ながさわの東の橋の上で合流したことがありました。

西島の乗り子は中学1年生（現在小4～小6）で青年団が指導し、泊まり込みで祭りの準備をし、高校生はかざり番の仕事がありました。屋台を懸ぎ上げた時に歌う音頭で、江州(ごうしゅう)音頭、伊勢音頭はあまり記憶にありません。

現在の屋台の布団は3枚ですが、昔は、西島の屋台の布団は5枚ありました。柳井の屋台は、森地区から購入したといわれています。

秋祭りは今も3つの村（東島、西江井、東江井）が一緒ですが、柳井は、金ヶ崎で魚住町であったことから一緒にはならなかったのです。小学校の校区が江井ヶ島になったことが影響したのか、柳井と何年か一緒に祭りをしたことがありました。

祭りについて終戦前は西島と森の2つが中尾の住吉神社に行っていました。森にもその頃は寺の北側に太鼓蔵がありました。

秋祭りでは、着飾らしてもらって、巻きずしや、イワシのすし、いなりずしでお祝いして、親戚が来ていました。動物タンパクがない時代ですから、町ではクジラ、田舎では鳥を絞めてカシワを食べました。

「明石の布団太鼓」の記事によると、森の屋台は、昭和25年廃絶し、中尾の祭りは西島地区として統合、西島の練番（ねりばん）が2回あるのはこの名残りです。

私の家に防空壕がありました。狭い所を掘って、木を置いてその上に土を乗せた程度で焼夷弾が落ちたらすぐに壊れてしまうような形だけの粗末なものでした。

B29（米軍の大型長距離爆撃機）を浜で見ました。江戸時代に作られた番所があって、その近くにしっかりした蛸壺のような防空壕がありました。実は敵が上陸してきたときに攻撃するもので、いっぱいそのようなものがありました。

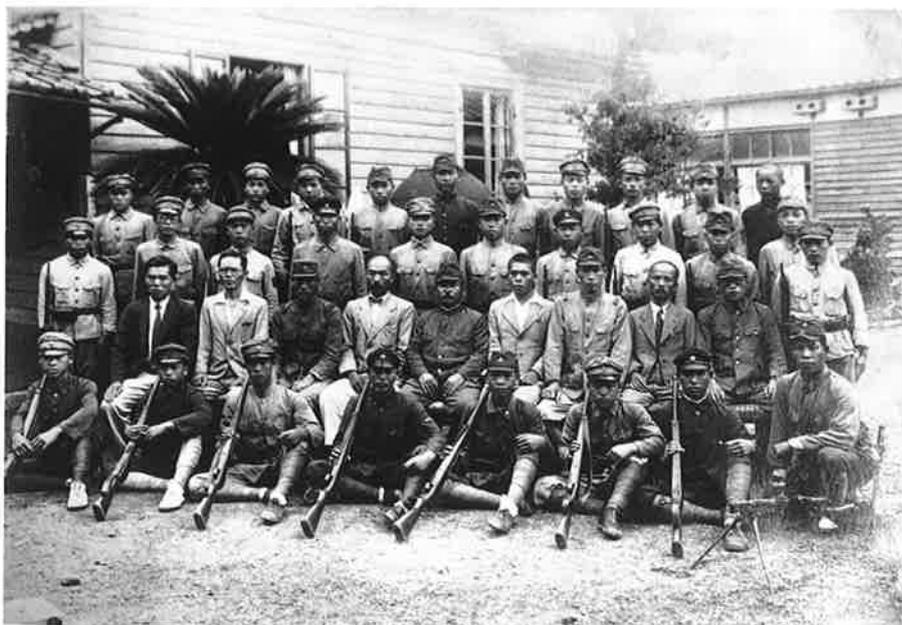
今から考えると幼稚で、日本はそんなもんでした。海に商船学校の船がおってアメリカの艦載機がブルルルと撃って行ったのを見ました。

川崎航空機の空襲は、昭和20年（1945）1月19日でした。貴崎の南に高射砲もありました。その高射砲が一つも当たりません。

山陽電車が林崎にかかると車掌が電車の窓を閉めるように指示があり、川崎の工場を見せないようにしていました。電車は昔の市電みたいに前に障害物を取り除くカウキャッチャーがついているのもありました。

林崎付近は、空襲で工場の生産部品が焼失することを恐れて民家に部品を下請けやメーカーが「預かってくれ」と言われて保管していた民家がありました。

あるとき母親が、山陽電車で帰る途中、川崎航空機の空襲により、西舞子で止まってしまって、歩いて江井ヶ島まで帰ったと聞きました。



昭和17年 江井島小学校での兵隊

江井ヶ島も爆弾は1発だけ海に落ちました。しかし被害はありませんでした。反撃する日本の飛行機なんかは見たことがなく、飛んでいません。焼夷弾が遠くに落ちるとばらばらときれいに落ちて行きまして、姫路の空襲も見えました。家が燃えて空が真っ赤になって夕焼けのようでした。

戦争中は、空が真っ赤になって防空壕に逃げ込んで焼夷弾が明石の方に落ちると西に逃げたらよいと、父は戦争に行っていましたので、母と一緒に魚住の駅近くまで逃げました。

余裕のある家は、防空壕が掘ってあり、人の避難用と衣料品を入れておく防空壕の2つありました。父が戦争で鹿児島におりました時に砂糖を送ってもらい、その頃の砂糖は、貴重品で壺に防空壕に保管をしていましたが、水が入ってしまったこともありました。何でも配給でお米なんかを何軒かで分けたものを隣保長の所にお手伝いで貰いに行っていました。

農業を営む家ではお父さんは兵隊に行っており、お母さんが田圃を作るのですが、お母さんは、人糞の肥料運びは慣れていないので苦労するのです。子どもも労働力として用事させられる状況で、男も女も一緒に働きました。

毎日の生活は、生産農家は戦争で兵隊にとられて作り手がいなくて、爺さんや婆さんばかりでした。農家は、政府に強制的に米の供出義務がありました。一反にいくらという風に、決まった数量を出すのですが、人出の有無で生産高が違ってきますが、同じだけ供出しなければなりません。

お父さんがいる家は、作物が良くできるが、お母さんの家はできが悪い、しかし、一反なんぼで決まったものを出さねばなりません。

稲作の作りが悪ければ、家の食べ口が減ってしまいますが、供出高は減りません。昔の年貢と同じ構造です。

江井ヶ島の農家は、小さい作地が多く、多くは兼業農家で、江井ヶ嶋酒造に勤務の人も多くの方が農業を営んでいました。

私の父は、商売をしていましたが、国の徴用で九州の炭鉱に働きに行きました。農業をしていたら、収穫の後、近所の人が下に落ちた稲穂を取りに来て、それを拾って家で一升瓶に入れておくのです。近所の人が盗っても食糧がないので叱る訳にもいきません。百姓の人はよいがそうでない人は、食糧は配給で、しかし配給もあてにならない状況、当時は隣保の結びつきが強く、助け合っていました。



昔の田植え風景

《漁業》



蛸壺漁に向かう船

浸食により崩壊した蛸壺製造工場
(江井ヶ島海水浴場東端)

タコをとりに行くときに事前に準備する蛸壺は、家でわらを5～6本ずつ編んでコールタールで染めて蛸壺に巻いてタコ漁に行くのですが、当時は蛸壺を使った漁が盛んでした。蛸壺漁は魚住と江井ヶ島の間が中心で、東は谷八木川の東まででした。昭和25年(1950)以降には東側は明石港まで行きました。

日常に漁の仕事をする船は、櫂を使って艫で漕いだものですが漁師は足腰が強くなかったらできません。

漁に行く船は、小さなエンジンで動かしているのですが、発電機の電気の着火部分のマグネットがよく故障しまして発電機を修理するのに明石まで山陽電車に乗って行かねばなりません。マグネット屋さんはすぐに故障が直らないので時間が必要で、故障を直す時間の間は「遊んできたら」というのですが明石なんぞに遊ぶところはありません。

鯛はあまりとれなかったですね。家から5～6キロ近辺に行きましたがあまりとれず、チヌなどがとれると「よいものをとった」と思ったものです。

ベラ釣りは淡路の方まで行ってとっていました。キス釣りも同じでした。時々ベラ釣りには出ますが、釣って帰っても今どきは家庭で料理が出来ない人が増え、人気がなくなりました。



初期の海苔網漁

今の漁の主力は海苔で9月から翌5月までが漁の期間です。海苔は昭和35年(1960)頃から初めて昭和44～45年頃から本格的にするようになりました。コンブ漁はもっと後からです。

昔はボラがよくとれ、ボラ漁は冬の仕事で結構商売になっていました。当時は水もきれいでボラは高級魚として刺身も美味しかったですね。小さな船でしたが何杯もとれました。

台風が来るとなると船を避難させる場所が必要で播磨町の本荘の古宮や別府川に係留をお願いしました。昭和34年(1959)の伊勢湾台風や昭和36年(1961)の第2室戸台風の、超大型台風では被害を受けました。

江井ヶ島には船大工の宮本さんがおられて、今の大工さんの親の代で兄が大工さんでした。舟一艘の値段は木造ではっきりした記憶でないので確かな話ではありませんが、昭和40年頃が木の船の最後で、当時の木造船は一艘200万円くらいでした。但し今の船はプラスチックですから50年は持ちますが木造船は5年からせいぜい20年くらいしか持たなかったですね。舟を新造すると価格の割合では、エンジンと舟代が半々くらいでした。

船でとってきた魚を仲買に売りますが、仲買組合の権利は、仲買の保証金という性格で、家の金庫に入れてました。漁師はとれた魚を仲買に江井ヶ島で販売していました。秋の売り上げが1年の半分ありました。

漁場は大阪湾の空港などの人工島、明石海峡大橋の完成で回遊魚のアジや、ハマチやサワラ、太刀魚などがとれなくなりました。

鹿の瀬の漁業権は、明石側で4つ、淡路側で4つありました。江井ヶ島は権利がなく権利を持っているのは明石、林崎、東二見、西二見、淡路は富島と浅野と育波と室津で8組合が持っていました。江井ヶ島は、古くから漁場がよくて鹿の瀬まで行かなくてもとれていましたので、そうなっていました。西二見は戦後に漁業権を得て、東二見は漁師が多く鹿の瀬でとっていました。

昭和25年(1950)に制度の改革があって林崎や明石から漁場のよい江井ヶ島にとりに来ました。明石の組合は、古くは潮に乗って東は神戸から西は播磨まで漁業ができ、その権利が江戸時代に認められていると主張していました。

蛸壺漁は、一人ひとりがどこに蛸壺漁をするか決まっており、今はそのようなことがなくなりましたが、新たな人が入って来ることは難しかったですね。

イダゴは疑似餌で釣ってました。蛸壺漁は漁場の特定場所の権利があって各々がそこで漁をしていました。昔は大きなボタン牡蠣と言われる牡蠣がとれていました。12月1日からとるのですが今はとれなくなりました。マテガイやホンジョガイもとれていました。ホンジョガイを我々はウマガイと言っていました。二見の人工島沖でとれていましたが今は時たまとれる程度です。

終戦後の話をしますと、船の燃料が手に入りにくくて遠い所にとりに行くことが出来ませんでした。帆の力を借りて潮の流れを計算して漁をしていました。夏などは蛸壺漁でした。

イダゴ用の蛸壺は小さくて江戸時代からありました。森で蛸壺を焼いていたと聞いたことがあります。

江井ヶ島の港に、行基が港を造った時に馬石、ミツイシという石があったという話が残っていますが、馬石は向いの島(一文字)の下になって今は見えません。

《瓦産業》

江井ヶ島で瓦製造が盛んになったのは、土が良く、粘土があったから焼き物が発達し、歴史的には大陸から仏教と共に伝わったもので、長坂寺に焼き物の神さんとして「たいしさん」を祀ったお寺（遍照寺）があります。

瓦を焼きながら帆船の和船で大阪の中之島公会堂に使う煉瓦を運びました。西島の川崎久左衛門さんが大きな和船を持っておられて、瓦などを運んでいました。



東江井の瓦工場

しかし、その土もやがて枯渇し、世の中では、公害が課題になり、多くの煙突があった瓦製造業者も煙害で廃業を余儀なくされました。

この辺りの産業は、瓦産業があって西島は植田さんと西海さんだけで、東江井に多かったですね。森の西山さん、今の明石窯業がありました。

《江井ヶ島酒造》

現在の江井ヶ島酒造の従業員は、30人程度ですが、昭和30年の前半（1955～1960）は300人ほどおりました。山陽電車の西江井ヶ島駅から多くの人が降りてきて江井ヶ島酒造に通勤をしていました。

昭和25年（1950）頃は酒造りに必要な糖分が十分になかった時代で、「あめや」と言う名前の場所にあった糖化工場で、でんぶんを煮詰め、糖にして合成酒を作っていました。合成酒はアルコールにブドウ糖、有機酸、アミノ酸などを混ぜて清酒のような風味を持つように作った酒のことです。

しかし、その後合成酒の売れ行きが悪くなって仕事も清酒を作る方に移り、タンクにある何種類かの酒のタンクから少しずつ抜いて調合用のタンクに入れる仕事となりました。そのお酒は、ろ過して瓶詰工場に送られます。当時は酒蔵が多くあって1番蔵や2番蔵などにゴムのホースや鉄のパイプ管を使って送られていましたが、ゴムのホースの場合は繋いでいるところが外れて中の酒が出たりするときもありました。

昭和25年頃は原料の米が十分でなく、市場に供給する酒の確保ができなく、島根のような遠くまで行って「買い酒」と言われる他の酒造会社から酒を購入していました。配送されたトラックからタンクに入れ替え、酒は課税対象の際たるものですから、その仕事を税務署が毎日立ち会って「見張り」をし

ていました。その折の会社は、税務署のご機嫌を取るのに一生懸命でした。

会社が終わると、当時はお金がない時代で酒粕（さけかす）を飲み屋に持って行って飲ましてもらってまして、今から思うと考えられないことです。

西島の人は、江井ヶ嶋酒造に勤めていた人が多く、昭和 25 年で日給が 110 円で、当時は半分も高校に行っていない時代で、3 年したら高校を出た同級生が入って来て月給 8,000 円もらってびっくりしました。よそは安くて江井ヶ嶋酒造だけ給料はすごくよかったことを覚えています。

昭和 30 年（1955）頃に、観光バスで江井ヶ嶋酒造の取引先の小売店を招待して、江井ヶ嶋の浜でペラ釣り船を仕立てて昼前くらいまで釣りをしていました。釣りが終われば会社の接待用の至誠館で芸者さん呼んで宴会をやっていました。昭和 30 年代後半まで続いていた記憶があります。

事務職関係では、得意先の出荷の数を 1 か月分、月初に作成しそれを集計して毎月末に締めて月初に石数（こくすう）に換算し、前月の実績を計算します。月初はとても多忙でした。それらを年末になると、税務申告用に書類を作成、税務署に報告しました。

私の家は、コミュニティ会館の近くで江井ヶ嶋酒造は 8 時半始まりでしたので 8 時 15 分に家を出て会社に行っていました。

宣伝部では「宣伝ガール」という仕事で、宣伝カーというバスの小さなようなものに乗って全国を 3 ブロックに分けて回ります。

この宣伝をした内容は、江井ヶ嶋酒造の 80 周年の記念誌に載っています。3 台の宣伝カーがありまして、それには運転手、外務員（営業）と私たち 2 人が乗って 4 人一組で回ります。

3 台は 25 日間、関東地方から北海道まで、近畿地方一円、岡山から九州の鹿児島までの地方と方向別に分かれて活動をします。九州などで活動をしていますと新たに交代要員が来て、私は江井ヶ嶋に帰ってきます。帰ってからは、行っている間の休日や祝日を計算して、また 4～5 日休んで九州に戻って行きます。

具体的な仕事は、当時はテープレコーダがなくてレコードをかけて走りながら声を出して宣伝をしているときなどもあり、車を走らせながら音を出すとレコードの針が飛んで苦労しました。

全国の酒問屋さんを回っていました。問屋さんを通じて、小売店さんに行って風船などの宣伝物を子どもに配り、宣伝をしていました。特にぶどう酒の「白玉ホワイトワイン」を中心に宣伝していました。

その頃は進物用によくお酒が使われていましたので、お盆と暮れになりますと百貨店などに行って宣伝をしていました。今になっては懐かしい思い出で、とてもよかったと思っています。



宣伝カーによる宣伝のようす

寿酒造（現サントリー）のワインは「赤玉」という名前でした。江井ヶ嶋酒造の「白玉ホワイトワイン」は山梨にワイナリー工場がありますが、当時はブドウを買ってきてこの江井ヶ嶋で生産をしていました。味は甘かったからご馳走みたいなものでしたので売っていました。段々それがなくなり今は甘くないものになりました。

じゃが芋を炊いて餡を作っていました。後に市会議員になる川崎久左衛門氏が課長で、遅くまで残業をすると焼酎場に行って芋を取ってきてポイラーで芋を焼いて課長にあげると怒られることもなく、「うまいまい」と言って食べてくれました。

会社は多くの子会社を設立して、酒の粕を加工する江井ヶ嶋食品や、でんぶんを取ったカスを豚の餌にして育て、もっと後ですがウナギを養殖する江井ヶ嶋産業という会社がありました。

終戦後、江井ヶ嶋酒造で焼酎の原料の芋の倉庫があって、九州や徳島などいろんな所から運ばれ、当時の国鉄大久保駅や江井ヶ嶋港から馬が荷車を牽引する馬力という車両で会社へ運送されてきました。それが家に前を通るたびに俵に入った中の白い大きな芋を、遊び心もあって、後ろから御者に見えないように勝手にもらっていました。

馬力の御者は、当時の食料事情がわかっていたと思います。子どもが取っても時々しか叱らないのです。当時は食べ物がない

時代でおなか膨れたらよいのです。干し芋もありまして焼くと美味しく、いろんな味が味わえました。

昭和31年か32年当時は、昼食代として1日100円が手当でありまして、うどんが30円でした。初任給が5,500円でした。昭和35年くらいの流行歌に給料が13,800円というのがあるってこの歌が流行って、それを私はレコードを買った覚えがあります。

江井ヶ嶋酒造の清酒のブランドは、こちらでは「日本魂（やまとだまし）」、東京は「神鷹（かみたか）」でした。「鷹」が付いた名前は値打ちがあるという話を聞きました。だから東京では「神鷹」のブランドでした。

山陽電車の西江井ヶ嶋駅の南で、今は駐車場になっているところに貨物の引込み線がありました。そこで遊んでいました。古い話ですが「江井ヶ嶋西口」（昭和19年（1944）に「西江井ヶ嶋」に変更）と言っていました。

江井ヶ嶋酒造の酒は馬力（荷馬車）で西江井ヶ嶋駅まで運んで山陽電車の貨物を利用して運んでいました。

昭和30年から40年頃が一番よい頃かと思います。一度だけでしたが、夏冬に加えて9月に決算ボーナスが出ました。社長車は専属の運転手付きでした。



江井ヶ嶋酒造の焼酎工場

結婚する折は、社長車を手配してくれて式場の住吉神社へ送ってくれました。会社に住吉神社の今の宮司の父親の西海茂雄さんがいたからでしょうか。

あの頃の酒は、作っては、売れに売れていました。

蔵の外の溝に湯がふんだんに流れていました。工場の横から独特の匂いのする湯から沢山の蒸気が出ていたのは、焼酎を作る時に熱を冷ますための水で、不要となった多くの湯を外に流すのです。その湯は無料ですから多くの人が、溝に流れた湯を汲んで家に持って帰り風呂に使っていました。

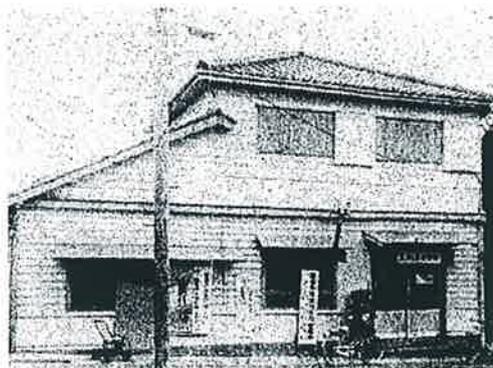
木で造った乳母車みたいなのに桶を2つ積んでこぼれるのを防ぐため浮き袋のようなものを下に敷いて運んでいました。子どもの頃の私たちの役目で昭和35年頃まで続いていました。知人の汲んだ風呂に入らせてもらったことがあります。

《電話交換手》

郵便局の2階で、郵便局の職員として江井ヶ島で、電話の自動交換機の導入まで手で交換業務を、岡田さんは4～5年、大川さんは10か月ほどパートアルバイトとして勤務していました。今から52～53年前の話です。昭和38～40年(1963～65)に交換機が自動化されることに伴い、郵政省から電電公社に移ることになり、いったん退職するか、引き続いて勤務するかを選択がありまして、退職する方は退職金の割増がありました。ちょうど私は結婚すると決まっていたので辞めました。

当時の江井ヶ島郵便局は波部(はべ)さんという方で、NTTになる前の話で郵政省の時の話です。波部さんが郵便局長として郵便と電話の両方を兼務していました。昭和39年に亡くなられて、その後、奥さんが局長を務められました。近所はまだ田んぼが多かった場所です。

郵便局は少年自然の家から西に坂を下がったところの左手(南側)にありまして、寄棟みたいな屋根で、横板が貼ってある2階建ての家で、下半分が郵便局と局長さんの住まいでした。その2階に電話室があり、3分の2が電話の機



2階で電話や電報を扱った江井ヶ島郵便局舎

械、3分に1が畳の部屋で、交替で休む所でした。交換手は12～13人が交替で、勤務していました。

電話局の取り扱い範囲は、江井ヶ島、八木、中尾、魚住の一部だったと思います。加入者は江井ヶ島が多かったように思います、従業員の12～13人は、サワラさん、オオヌキさん、サトウさん、イマイさん、フクイさん等の名前を思い出します。江井ヶ島や近隣の方だけでなく電車通勤で来られてた方もいました。

勤務は日勤、泊り、遅出の勤務体系で7時間の交代勤務でした。泊りは2人体制で1人は寝て1人が業務でした。私は家が近かったので、家の人が夜の弁当を持ってきてくれて、ブザーで知らせてくれるのです。その弁当を上から綱で引っ張ります。ぬくぬくの弁当を食べました。何人かはそのようにしていました。

勤務の泊り明けは休みで、一般企業と違って有給休暇はちゃんと取ってくださいなど、厚遇な職場で、

割合楽でした。

パートの人は昼の勤務だけでしたのでそのようなことはありませんでした。当時の交換手は、どことも女性だったと思います。交換台で「はいー」って出た方が相手先にも気持ちが良いですね。

今と違ってダイヤルではなくて電話交換手がすべて操作をしていました。お客さんが磁石式電話機のハンドルを回して交換手を呼出し、「何番」と言ったら相手の方につないで「はい、どうぞ」と言っていました。

電話の場合は「市内」と言う表現がありますが、これは「江井ヶ島局」のことで「市外」は江井ヶ島以外を指し、私たちはその時は明石局につながることとなります。

通常の電話は市内が多く、まずは「はい何番ですか」と聞き、相手が「市外お願いします」と言われたら明石局へつながります。

市外に通話するとき、混んでいるときにはお待ちいただくのですが、時間によっては回線が空きませんので待っている方は受話器を持ったまま待っていただいておりますので、「遅いなあ」とよく叱られました。

市外の場合は電話が終わった直後に電話料金が明石局から「今の通話は40円です」などかかってきました。それは計算しているのですかとのお話ですが、私たちの江井ヶ島局は単に交換業務だけですから分かりませんでした。

当時はいたずら電話などありませんでした。かけられた方の表示が電話交換台に出ますのでどこからかかったか分かり、「何番」と言うのを聞くとその番号の所につながります。また、つなく相手が話中の場合につないでいることが交換台でわかりますから「お待ちください」と言って待ってもらっていました。

おおよそ江井ヶ島局では500ほどの加入者が居りまして一生懸命、番号を覚えたものです。今はもう忘れましたが、番号は1～5番が江井ヶ島酒造、49番は小学校、中友さんが12番、11番がショウタロウさん、21番が尾仲さん、商売で仕事されてた方は若い番号がついていました。電話番号がわからなくも、例えば相手先の屋号や名前を言えばつないでいました。

交換業務の朝方は忙しかったですね。交換台を通す電話ですからジャックを差し込み、つないでいくのですが、話の内容が聞こえますので守秘義務が強く要求されました。この点は他の職業よりも厳しい倫理観を持っていました。

又、今と違って電話がある家の近所がその電話を「呼出し」として助け合って利用していたことも多かったですね。古き良き時代ですね。

古い電話機は受話器と送話器が別で壁にかけてありました。その後、送受が一体になった今の形になりました。

電話には、甲と乙という1台で2軒が使うような方式がありました。

電報については、昼間の電報は郵便局が受けますが、夜の場合の電報の取り扱いはお客様が、下にありますブザーを押すと私たちが居ります2階で鳴り、2階から窓を開けて用件を伺い、「電報をお願いします

します」と声をかけられますとすぐ下へ行って電文を書いていただきます。

料金を頂いて、2階から、「ア」は「朝日のア」、「イ」は「イロハのイ」と言いまして五十音の和文通話表に基づいた言い方で送ります。受け手の明石局の人は普通の文章にして確認のために反復して返してきます。

電報では「ハハキトク」と言うのがありました。「はがきのハ」と言うように明石局へは間違いのないように通話表によって送信をしました。電報は文字数によって料金が変わりますから分かり易く文字数を少なくするのが電報の良さですね。

受信は、その反対で受けて、受信した電文を配達するのですが、電報の配達は24時間いつでも対応をしていました。東島の橋本さんがその配達を担っていました。ブザーで知らせ、郵便局に取りに来てもらい、自転車で配達をするのです。

私たち交換手は資格を持たなければ仕事できません。京都の伏見桃山城の近くに教育訓練施設があり、交換手だけでなく、保険や郵便の研修を行っていました。

お正月が過ぎて、寒い中、各地から交換手が来て、そこで1か月間、4人部屋の寮生活で訓練を受けて交換手の資格を取りました。今でも淡路と大阪の方との交流があります。その後、自動化により、神戸の電電公社に設置してある実際の自動交換機を江井ヶ島から数人が見に行きました。

昭和41年（1966）頃江井ヶ島に自動交換機の設備が西江井島病院の西側のビルに導入されて今に至っています。

江井ヶ島の局番が「6」、二見は「2」に割り当てられ07894が市外局番でした。その後に「6」以外に「7」が増え、その後、市外局番が078になり、市内局番は94が頭について「946」「947」になり、市外局番が明石・神戸と一体になり、神戸にも市内としてかかるようになりました。

「昔の江井島を語る」 座談会

※敬称略

- ・ 第1回 平成28年6月15日
「島のみみぶくろ」編集者が歴史の記憶と経験を語る
語り部：崎野とし彥
- ・ 第2回 平成28年9月15日
昭和9年生まれの同級生が戦中、戦後の学校生活を語る
語り部：橘保・卜部孝・橘信雄
- ・ 第3回 平成28年11月25日
江井ヶ島に住み続けて80年の女性たちがしきたりや慣習行事を語る
語り部：石井友子・橘富栄
- ・ 第4回 平成29年3月26日
江井島小学校同窓生、懐かしく語り合う
語り部：卜部直之・坂口三千雄・橘雄三・橘幸男・田中勝
西海輝・西海幹雄
- ・ 第5回 平成31年2月8日
江井ヶ島電話局の電話交換手の仕事の様子を語る
語り部：岡田かほる・大川文子
- ・ 第6回 令和元年6月21日
江井ヶ島酒造で勤めていた経験を語る
語り部：卜部孝・石井友子・大川文子
- ・ 第7回 令和元年10月3日
江井ヶ島の漁師として語り伝える
語り部：橋本忠男・橘信雄・橘保



【あとがき】

江井ヶ島は古くから漁業、農業、酒造業、窯業などで栄えてきた地域です。住みやすいところであるので、現在の人口はおよそ1万5千人になっています。若い世代が増えていることは喜ばしいことですが、年輪を重ねられた方々が歩んできた江井ヶ島の歴史を伝えることも必要であると思います。

江井ヶ島に長く住んでこられた方々から、座談会形式で様々なお話をうかがい、それをまとめたのがこの冊子です。古い時代の地域の記憶はもちろんですが、当時の仕事の様子、生活習慣や習俗の移りかわり、自然環境や社会環境などの変化も語られています。かつての江井ヶ島の暮らしぶりに思いをはせる糸口になれば幸いです。

住んでいる土地に愛着を持ち、誇りを感じる事が、地域コミュニティづくりには大きな力になります。この冊子がその一助になればと願っています。

なお、座談では特別な制約なく語っていただきました。それを記録するにあたっては、お話になられた内容を尊重し、内容を改めることなどはしておりません。

この冊子を作成するにあたって、お話を聞かせていただいた方々、また、写真や資料をご提供いただいた方々など、地域の多くの方々にお世話になりました。誠にありがとうございました。心よりお礼を申し上げます。

語り伝える えいがしま 昭和のくらし

発行 令和3年(2021)3月1日
編集者 江井島まちづくり協議会 文化遺産部
明石市大久保町西島 252
(江井島小学校区コミュニティ・センター内)
電話・FAX 078-946-0149
メール eigashimacc@yahoo.co.jp
デザイン・制作 有限会社 アディスト

